

### 「井上陽水」と「ユーミン」「中島みゆき」その4

きりがないので、中島みゆきの「糸」と、ユーミンの、「春よ、来い」でいったん締めます。

「糸」中島みゆき作詞作曲

なぜめぐり逢うのかを  
私たちはなにも知らない  
いつめぐり逢うのかを  
私たちはいつも知らない  
どこにいたの 生きていたの  
遠い空の下 ふたつの物語  
縦の糸はあなた 横の糸は私  
織りなす布は いつか誰かを  
暖めうるかもしれない

なぜ生きてゆくのかを  
迷った日の跡の ささくれ  
夢追いかけて走って  
ころんだ日の跡の ささくれ  
こんな糸が なんになるの  
心許なくて ふるえてた風の中  
縦の糸はあなた 横の糸は私  
織りなす布は いつか誰かの  
傷をかばうかもしれない

縦の糸はあなた 横の糸は私  
逢うべき糸に 出逢えることを  
人は 仕合わせと呼びます

「春よ、来い」松任谷由実 作詞作曲

淡き光立つ 俄雨  
いとし面影の沈丁花  
溢るる涙の蕾から  
ひとつひとつ 香り始める  
それは それは 空を越えて  
やがて やがて 迎えに来る  
春よ 遠き春よ 睨閉じればそこに  
愛をくれし君の なつかしき声がする

君に預けし 我が心は  
今でも返事を待っています  
どれほど月日が流れても  
ずっと ずっと 待っています  
それは それは 明日を越えて  
いつか いつか きっと届く  
春よまだ見ぬ春 迷い立ち止まるとき  
夢をくれし君の 眼差しが肩を抱く

夢よ 浅き夢よ 私はここにいます  
君を想いながら ひとり歩いています  
流るる雨のごとく 流るる花のごとく

春よ 遠き春よ 睨閉じればそこに  
愛をくれし君の なつかしき声がする  
春よまだ見ぬ春 迷い立ち止まるとき  
夢をくれし君の 眼差しが肩を抱く

中島みゆきは「幸せ」ではなく「仕合わせ」とする。

「仕合わせ」という言葉には幸せという意味もあるが、「めぐりあわせ・運命」という意味もある。

その意味を含めてこの歌詞をよく読んでみると、会うべき人に会うことは定められた運命と読み取れないか。

言ってみれば、出会いというのはそれ以上でも以下でもない一つの事実と現実なのだ。

調査する糸を重ねて、布を織るように私たちは、いろいろな試みを重ねてきた。

糸をどのように布へと変えていくか、つまり、出会いをどう成熟させていくかが重要なのだと思う。

「なぜ出会うのか、いつ出会うのか」その理由は分からずとも、出会いそのものがいつか別の誰かを救っていくのではないか。そんなことも考える。

この世界は、こんな言葉の数々で成立しているのだけれど、この言葉のセレクトの方向性に、気高く熱き哲学も溢れていると感じてしまうのは、私だけなのか。

現代の言葉の数々と古語の文法が織りなす印象は、まさしく「やまとうた」の心となる。

間違いのない心の奥底に届く人の人を思う心が忍んでいる。

こんな言葉のスタンスで生きてこれたらどんなに良かったらうにと、今、後悔したところで戻ることのない60年を見渡して、もう一度前を向かなければ進めない自分がそこにいる。

「とても申し訳なく思っています。でも、こうしてくるしかできなかったことをお許しください。」としか言えないなあ。

もういちど、やり直してみますか。

